

2020年5月17日(日)瑞穂キリスト教会 主日礼拝

メッセージ題 「出会いの尊さ」

聖書：使徒言行録第3章1～10節

牧師：秋山 義也



・「ステイ・ホーム」ができない人を思う

私が教会で生れ育ってきた中で得てきたかけがえのない恵み、それはハッとする言葉との出会いがあったことです。自分には思いもよらない人たちとの出会いにトキメキを感じてきたと、振り返ります。

コロナ禍で聞かれる、「ステイ・ホーム」の言葉に対して、「ステイ・ホーム」できない人たちがいると発信してくださるキリスト者の方々がいます。それは医療従事者や、生活に必要不可欠なものを提供するために働く人はもちろんですが、ステイする、そのホーム（家）自体がないんだという意味です。野宿者の方がいます。今回のことで仕事を失い、家を失い、寝床を転々としているという人もいるでしょう。他にも「家の方が危ないという人もいる」と警告を発して下さる人がいる。感染するのではないか、させるのではないかヤキモキし、自分の家にいられるということは、それらが整っているからです。しかし、皆が同じ危機の中にいる時に、実はこういう事情の人たちがいるんだけれど、と。いろんな事情のある人たちの思いの声を代弁してくださる方がいる。そのような声に、私は度々ハッとさせられるのです。

・生きづらさを抱えた人々に寄り添う働き

昨日、私はNPO法人からし種の理事会に出席しました。この団体は、「生きづらさを抱えた人々に寄り添う、からしの大樹」という標語を掲げ、聖書の言葉を理念にした団体です。その働きは、生活困窮者や障がい者、刑務所から出てきた人など、様々な生きづらさの人たちと出会い、声を聴き、共に生きるということを大切にしてきました。瑞穂教会近くに、事務所兼シュルターがあり、瑞穂教会もここ数年クリスマス献金を贈ったり、からし種から代表の佐藤さんを招いて、その働きを聴いたりしてきました。祈祷会で毎週その働きのために祈ってもいます。

からし種における、コロナ禍のことで、起きていること。ここでも正に、今、様々な人たちが、生活に困って相談があり、電話や訪問があるとのことです。事情を聴くと、その多くが「住所がない」というもの。1人10万円の給付を受けるために、住民票が必要だということで、からし種と、他のNPO、また行政が協力して運営している「野の花」（新栄）という施設において、そうした人々が住民票を得られるようになってはいるのですが、その手続きをしてくれないか、という依頼の電話が多く寄せられているとのことです。一人ひとりの事情を伺い、本人確認も含めていくつかの手続きを行い、職員の方々が対応に当たっているとのことです。ここが今、私たちの身近にある一つのいのちのセーフティネットになっていることを教えてもらうのです。

・足の不自由な男性を思う

今日、ペトロとヨハネが出会った一人の人も、正にステイ・ホームができないところにある人でした。神殿の「美しい門」の前で、日々、施しを受けて生活していたのです。生れながらに足の不自由な男性。どんな思いで、育ち、そのハンディを受け止め、そのような生活に至ったのでしょうか。周りの人が、そこに運んできたのです。人々は彼が、そうやって生きるしかないということを受け止めていたのです。そして彼自身も、人から施しを受けることで、生きるしかない。足が不自由だから。と、その毎日を過ごしていたのでしょう。神殿の中に、このようなハンディをもつ人が入ることは律法で許されていませんでした。神殿前の門に来ることまではできました。そして神殿には、祈り、つまり礼拝に来る人々が必ずいたのです。その人々を頼みとしていたのです。

・ペトロとヨハネの「ハッ」とする出会い

先週、使徒言行録2章において、聖霊の風を受けた弟子たちの出来事、炎のような舌が分かれ、そこにいた人々が様々な国の言葉で話し出したというペンテコステの出来事を学びました。そして、その後、ペトロが説教、つまり神の言葉を語りだしたのです。人々に、救い主イエスを証ししたのです。「主の名を呼び求める者は皆、救われる。」(2:21)。ペンテコステの出来事は、聖霊を受けた弟子たちが、教会、キリスト者と呼ばれる者となり、世界中の言葉をもって、神の福音を語り始める。福音を宣べ伝える働きに出かけ、いのちと出会っていく、そういったスタートの日です。そして、ペトロが説教した後に、一番初めに会った世界の人とは、今日、私たちも共に今思い巡らしている、足の不自由さを抱え、施しを受けて生活している一人の男性でした。神殿の前に座りこみ、人目にほとんどつくことのなかったであろう、その人でした。この人とのハッとする出会いを、神はペトロとヨハネに、またこの一人の男性に備えてくださったのです。

・「ハッ」とする出会いへ招く聖霊

ペトロとヨハネは、これまでも神殿に祈りに来ていました。2章46節には、「毎日ひたすら心をつにして神殿に参り」とあります。毎日の出来事だったのです。この男性もそれまでに、そこに座っていたでしょう。しかし彼らが出会うことはありませんでした。視界にはお互い入っていたかもしれませんが、でも、話すことも、互いを知ることもなく、一方は礼拝に。一方は施しを受けるために来ていたのです。聖霊を受けるといふこと、そして神の言葉を語るという生き方は、私たちに「ハッ」とする出会いへと招いていきます。これまで見えていたけれど、「ちょっと面倒になりそうだ」という出会い。ステイ・ホームできない人がいるんだ、というそういった状況を知り、「それは自己責任」と言ってさよならしてしまうのではなく、ではそこからどう共に生きるのかという出会い。そういう出会いを与えられていくのです。

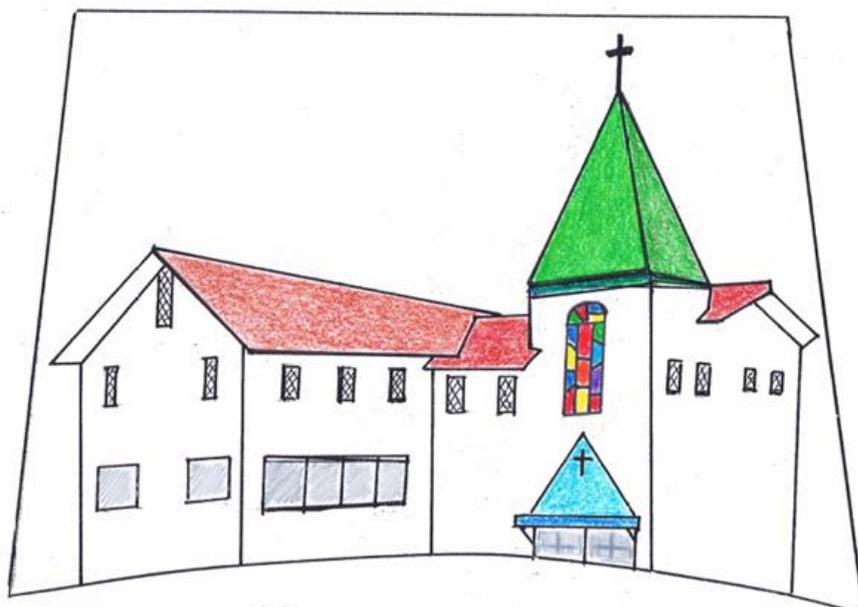


・おなじいのちだと知る時間

その一人の男性は、ペトロとヨハネをいつもの神殿の前において見かけ、施しを乞いました。彼にとって、いつもの出来事です。多くの方は、素通りするか、もっているお金を分けて、立ち去っていったでしょう。しかし、ペトロとヨハネは違いました。その座っていた男性をじっと見つめたのです。その人から、そこにあるいのちから目をそらさないのです。そして、「わたしたちを見なさい」と言うのです。これまで、互いに見る事も、知り合うこともなかった両者です。しかし、主はこのような出会いを備えてくださるのです。それは、ただ一方的に、「この人は足の不自由な人でかわいそう」「施しを得ていて憐れな人」と決めつける出会いではありません。ここにあるあなたのいのちも、あなたの前にあるわたしたちのいのちも、おなじなんだと、互いを互いに知る時間のことなのです。

・礼拝の場へ共に

弟子たちを見ながら、男性は何かもらえるのか、と期待しました。その期待、目的はいつものお金でした。しかし、ペトロたちは彼を見て、出会い、その求めの一番根っこにあるものを知りました。それは、立って、歩くというものでした。生れながら足の不自由な人。彼がここまで生きる中で、立って、歩く人を何人も見、またそれを望むということがあったでしょう。しかし、それができない。できないなりに生きていこう。それが神殿の前で、日々、施しを受けるということでした。しかし、ペトロは彼の求めに対して、真っ向から「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい」（6節）と宣言するのです。そして語るだけに留まらず、彼の手を取り、立ちあがる補助をし、彼は足とくるぶしがしっかりしたのです。その時の思い、感動は歩き出す前に、「躍り上った」という言葉に現れています。金や銀では治せないものがある。お金を得て、その日その日を暮らすことはできる。しかし、どんなに願ってもお金では叶わない願いがある。彼にとってそれは、自分の足で立ち、歩く、ということでした。それが、この出会いによって、叶えられたのです。金や銀ではなく、ナザレの人イエス・キリストの名によって、それがなされたのです。そして、神を賛美したのです。ペトロとヨハネとの出会いは、これで終わりではありません。イエス・キリストの名による出会いは、彼の生をイキイキとした、喜びに満たし、共に礼拝の場へ、境内に、今まで入ることのなかったその神殿の中へと誘うのです。民衆の顔は、驚きに満ちていました。



・いやしと礼拝、宣教

ペトロは説教を行いました。「主の名を呼び求める者は皆、救われる。」(2:21)という言葉。そして、そのすぐ後に、この男性との出会いが与えられ、イエスの名による救いのわざ、いやしが行われたのです。そして、3章11節からは、再び説教をする。神の言葉が宣べ伝えられています。ここには、御言葉といやしの連続性があります。二つで一つなのです。救いを語ることと、いやし、回復が起きること。その出会いの尊さによって生きることは、キリスト者にとっての礼拝の出来事なのです。今日、私たちが豊かな学びをいただくのは、この出来事が起きたのは、当時の人々の多くが礼拝の場とと思っていた、神殿の外での出来事であったということです。礼拝の場で起きたのではなく、そのようなところに入れない人との出会いの場で起きたのです。しかし、癒された彼は神殿に入る前に、その場所で神を賛美しました。イエスの名によって、立ちあがり、歩ける。この喜びを、そのところで表したのです。

私たちも、このような出会いを、教会で与えられたい。もしかすると、教会の外でかもしれません。今日、ステイ・ホームできない人がいる。どこにいて、何をしているのだろうか。どんな思いで、今日を過ごしているのだろうか。豊かに思い巡らしたいのです。私たちに救う力はありません。なくていいのです。でもその出会いを大切にしたい。互いをしっかりと見て、そして、イエスの名による救いのわざを証ししたいのです。あなたのいのちは大切に、わたしのいのちも大切に。主イエスが共におられるから、共に生きようと、宣言したいのです。

互いに見つめ合う出会い。それは、私たちがまず救われたということを大事にしたいのです。イエスの名を語るペトロの背景には、イエスの名をかつて、三度知らないと言ってしまった苦い経験があります。主イエスが十字架につけられる前のことです。しかし、主イエスは、その彼を思い、「あなたのために、信仰がなくならないように祈った」と言ってくださるのです。「だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい」(ルカ22:31~32)と言ってくださったのです。ペトロは、その言葉通りに生きたのです。今度はイエス・キリストの名から離れず、イエス・キリストの名による救いを大胆に語り、また、その名によって人々がいやされることを信じて、共に生きたのです。この一人の男性との出会いもまた、彼にとって、自分が救われた感謝を表す時だったのではないのでしょうか。そして、彼らの出会いは、共に神殿に向かっていく出会いなのです。立ちあがる時に、自分の手を出し、補い、共に生きようとする出会いなのです。

・これからの隣人との距離感の中で

ソーシャルディスタンス、という言葉が当たり前となっています。近づかない。近づきすぎない。感染予防の観点では確かに有益なのでしょう。しかし、私たちは、助けてという声に敏感でありたい。多くの人が今、様々な出来事で、また人との関係によって痛み、傷ついている時代の中で、その痛みを敏感でありたい。もう立ちあがれない、という声に耳を澄ませたい。そして、私たちの持っているものは何かを、今、しっかりと確かめ、語り、いやしと礼拝の場に遣わされていきたいのです。ナザレの人イエス・キリストの名によって、立ちあがり、新しい一週も共に歩んでいきましょう。